



8・28 水害

～防災メッセージ～

教育長 津野庄一郎

あれは私が関小学校に入学した夏のことです。昭和42年8月28日、その日は朝から雨が降り続けました。午後には荒川の水位も上がり危険が迫ったとして、消防団の方たちが、高台の関谷中学校に避難を呼び掛けていました。ところが、私のお父さんお母さんも、おじいさんおばあさんも、まさか自宅に水が上がることはないと思っただけで、避難しませんでした。夕方、増水した荒川の水は、ついに堤防を突き破り、鉄砲水となって「どーっ」と押し寄せ、瞬く間に家々を飲み込んでいきました。私たち家族は大慌てで2階に駆け上がりました。しかし、大水はそこにも達する勢い。私はお父さんに、妹はお母さんに命綱で背負われ、一番高い屋根へと登りました。真っ暗闇の夜です。滝のような大雨、ごんごんと流れる濁流、ぎしぎしと音を立てて流される家屋、逃げ遅れた人が合図する懐中電灯の光り。声も出ず身を寄せ合い、震えながら一晩を過ごし、果たして私たちは流されることなく奇跡的に助かったのです。

それから、自宅でしばらく水も食料もままならない避難生活を送るわけですが、あのおびただしい流木や身の丈を超える土砂を取り除く作業

が、いつまで続いたかは覚えていません。いませんが、大人たちが、汗水流して懸命に作業していた姿は、今でもよく覚えています。

あれから 57 年の月日が経ち、自宅の茶の間の柱を見上げるたび、あの夏の日を思い出します。のちに「羽越水害」と名付けられたこの自然災害で、尊い命を奪われた方は、関川村だけで 31 名、行方不明は 8 名のほります。その後、村の人たちは団結し、すっかり変わり果てた土地を、美しい田や畑に変えていきました。今日の関川村の発展があるのは、この苦しい状況をみんなで我慢し、助け合い支え合って頑張ってきたお陰なのです。どうか、皆さんも先人の思いを受け継ぎ、ふるさと関川村を愛し、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生き抜いてほしいと思います。

「まさか、そんなことが起きるはずはない」という間違った考え方を「正常性バイアス」と言います。あの東日本大震災で、児童生徒がほぼ全員助かったのは岩手県の釜石市。人はこれを「釜石の奇跡」と呼び、その避難三原則が語り継がれています。それは「想定にとらわれない。最善をつくせ。率先避難せよ」です。

8 月 28 日は、関川村の人々にとって、防災や命の重さ、そして、村の将来を考える大切な日です。ぜひ、お家の方と一緒に話し合ってみてください。

【写真】全壊した屋根の上、下関集落の真ん中が、荒川の本流になった